

# 恩師との旅 “茅葺屋根を訪ねて”



八木 伊三郎

YAGI Isaburo

芦森工業(株)常務取締役  
パルテムカンパニープレジデント

## ● 二人の師

私は、自分のことを少しは骨がある人間と思っている。しかし、上には上がいるもので、私の近い人で、この人の気骨（反骨精神）には勝てない、すごいと思える人が二人いる。このお二人には、今までに一方ならぬお世話になっている。

一人は私の会社の元上司でPALTEM（Pipeline Ashimori Method's Lining SysTEMであったものを、Pipeline Automatic Lining SysTEMとして頭文字をとってPALTEMと名付けた。）の生みの親である。今、私がそのパルテム事業の責任者である。30数年前のPALTEMは、反転工法（ホースライニング工法と言っている。）のみを指していた。反転工法は、接着剤が内側に塗布されたホースの内外面をひっくり返して管の中に挿入して管更生を行う技術である。日本で初めての管更生技術であり、オリジナルジャパンである。元上司はすでに他界しておられ、元上司のことを思うとき、パルテムはいろいろな工法からなる工法の集団となっているが、今の技術に磨きをかけると共に、さらに非開削技術で世



三方が解放された「茶堂」

の中に貢献できる新しい技術を提供する思いを新たにする。

他の一人は私の大学時代の恩師である。どちらの方も私より歳が20ばかり上であるが、お二人とも「八木は強引だ。俺の言うことを聞かない。ただ、見ているところがよい。」といった話をされる。元上司とは、私が1989年から1992年までロンドンに海外赴任をしているときに、責任者としてよくヨーロッパに來られ、当時、私の運転で、イギリス国内はもとより、ライセンサーがいたコンチネタルに車で渡り、ベルギー、フランス、ドイツ、オランダなども仕事での旅をしたものである。

## ● 研究室の同窓会

私は、東海地方の某地方国立大学の出身である。我々の卒業後、その恩師を中心に4年に一度の研究室の同窓会が開かれる。研究室の卒業生は185名いる。研究生などを入れると200名を超える。同窓会の名前をいつわ会という。「いつわ」というのはオリンピックの年に同窓会を開催することに決めたことによる命名である。はじめの頃には会の構成者の80%が出席した。今年開いた第10回（40年経った、正式には36年である。）には3分の1の人が出席した。なぜこんなに出席者が多いのかについては、正月に先生からいただく年賀状に「今年はいつわ会の年で、○月○日を予定しています。」と書かれている。そうしたことから私の場合は年初からいつわ会の日を予定に入れている。そして、数年前から、4年に一度の割でやっているとその間に先生がなくなるといけないからという理由で、ダーマ茶堂と名付けた旅行会（ミニ同窓会）を春、秋に企画するものが現れた。私もそのダーマ茶堂に出席することにした。  
※茶堂：広さは2間（3.6m）に1間半（2.72m）くらいで、三方が解放された、茅葺き屋根の素朴な

建物（お堂）。一般には、木像、石像等の諸仏を安置して祀り、信仰と社交の場としての役割を果たす。現在も日本の各地に存在している。

## ● 茅葺屋根の家

先生は茅葺屋根の家を訪ね、先生流の癒しを求めることを趣味にしておられる。茅葺屋根の家は、山里、農村のふるさとの象徴となっている。また、神社・寺社などの本殿や宿坊、前述した茶堂などにも茅葺が用いられているところも多い。先生は、沖縄から北海道まで茅葺屋根の家をインターネットで探しては、そこを訪ねて実際に自分の目で茅葺き屋根の家を見るということを趣味にしておられるのだ。ダーマ茶堂やいつわ会では先生が撮影された写真を放映する。茅葺屋根の家を訪ねる趣味をはじめられたころは、奥様の運転で日本各地を回られていた。奥様もお歳になられた今は、タクシーを雇って茅葺屋根を訪ねられる。先生が興味を持っておられるのは、そのまま残っている茅葺屋根に対してであり、トタンや銅板が被っているものには興味をお持ちでない。茅葺屋根には、葦やすすきが使われるが、材料を手に入れにくくなっていることや茅葺屋根の葺き替えや補修作業では、地域住民の動力提供による共同作業「結（ゆい）」と呼んでいる。を行っていたが、そうした風習がなくなり、技術を有している専門家が少なくなったことから、日本から茅葺屋根の家がどんどんとなくなっている。

※茅葺屋根の家の減少について：先生によると、昨秋に行かれた出雲の斐川・平田地区（出雲のそり棟で有名）では、3年前は30近くあった茅葺が残っているのは12になったとのこと。これは保存民家でない普通の民家の日本の現況。重要文化財や市町村保存民家でも財政難で維持が困難となり始めている。

ダーマ茶堂の旅行会は一泊二日で行うので、二日目には、先生は茅葺屋根を訪ねられる。それではということで先生と茅葺屋根のある家を私の車で訪ねることを買って出た。ダーマ茶堂は今まで5回行っており、私はダーマ茶堂に全て出席しているが、ダーマ茶堂2日目の茅葺き屋根の探索の旅では、先生を乗せて今までに2回（他の1回は花鳥園に先生をお連れした。）行っている。

## ● 講演会の計画と茅葺屋根の家の探索

今年は、いつわ会の年であり、秋のダーマ茶堂は行わないことになった。一方、私が支部長をしている大学工学部の大阪・奈良・和歌山支部の同窓会で、総会（春に開催）とは別に、今年は“秋の講演会”を企画していた。その講演会の講師に私の恩師（先生）に来ていただき1時間余りの講演をしていただいた。講演会は大坂城が見える某会社の高層ビルの最上階のレストランで行い、『茅葺から茅葺へ』—the Secondの歩み—“トップの姿勢が後で響く”と題した講演で先生の生き様を語ってもらった。

そして、その翌日に、先生と行っている恒例の“茅葺屋根の家の探索”を行うことにした。

## ● 岡山の茅葺屋根の探索

先生が岡山県で行きたい16件の候補地を選んで、大まかなルートを考えておかれた。私の中から絞り込み、一日で回れるルートを先生と予め打ち合わせておいた。

講演会后、5人が宿舎に集まり酒を飲みながら夜の12時ころまで飽きもせず、昔話を繰り返した。一人は夜遅く帰宅し、翌日、長野から来ている一人を車で送り、関西に住む他の一人を同じ車で拾って、朝7時に出発。今回のメンバーは、2級上の先輩と2級下の後輩と先生と私の4人。今回探索した箇所は以下の8か所である。

- ①岡山県大原村 美作市（旧大原町）宮本武蔵出生地として観光名所化している。「平尾家」
- ②岡山県美作市中谷（東粟倉村）重要文化財「林家住宅」
- ③美作市長尾818-2「天徳寺」（宿泊施設）
- ④岡山県西粟倉村影石1099「堂屋敷」「中島家住宅」
- ⑤岡山県真庭市田原山上2127 普門寺
- ⑥岡山県総社市上林 国分寺跡 吉備路風土記の丘「旧山手村役場」「松井家住宅」「茶屋」
- ⑦岡山市北区足守752 「旧足守藩武家屋敷」
- ⑧岡山市北区足守803 「近水園・吟風閣」





武蔵の姉が嫁いだとされる「平尾家」



重要文化財「林家」

### ● 宮本武蔵と茅葺き屋根

私が作成した予定表にはじめ宮本武蔵生家と書いておいた。車中で、先輩が自分の記憶では、「武蔵生家は、茅葺き屋根でない。」との話をしはじめた。先生は、私が記した宮本武蔵生家は誤りで、武蔵の姉の嫁ぎ先が茅葺き屋根で残っているとの話をされ、その家が「平尾家」という。武蔵は、その姉の子と養子縁組をしている。武蔵が有名になってからお家騒動のようなものがあるとの話をされた。そう言えば、私も一昨日、上司（今の私の上司は一人しかいない。）に土・日をどう過ごすのか（工場のゴルフコンペがあり出席しないのかとの話から）との話をしたときに同じ話をしていたことを話した。

※宮本武蔵の生誕地について：武蔵自身は、著書『五輪書』に生国播磨と記しており、播磨国（現在の兵庫県）生まれであるが、吉川英治の小説『宮本武蔵』などで書いている美作国（現在の岡山県）

で生まれたという通説の方が有名で、通説に基づいて岡山県および美作市（旧大原町）が宮本武蔵生誕地として観光開発を行っているとのことのものである。

武蔵の里に着き、宮本武蔵駅、武蔵武道館など立派な建物があつたが、我々は、それらに見向きもせず、地元の人に「平尾家」を尋ね、そこを目指した。

「平尾家」は、「元屋敷」と云う屋号で大原町内で最も大きい茅葺きの家。慶長5年武蔵が武者修行に出立した時、家の道具・系図・すやり・十手を姉おぎん夫婦に渡し、その後元和9年おぎんの次男九郎兵衛景貞がここに居住し、武蔵家を相続したと伝えられる。現在も人が住んでおられる様子である。

（茅葺き屋根の探索では、実際に住んでおられるお家もあるので、その気配があるところでは、遠くから写真を撮るのみとしている。）



民宿として使われている「堂屋敷」



宿泊施設として利用されている「天徳寺」



「中島家」

## 重要文化財「林家住宅」

1786年に建築された林家住宅は、美作地方一帯の地主、大庄屋の構えを残している貴重な文化財として、昭和44年に国の重要文化財に指定された。林家は武士の出で近世この地に土着し、その後は庄屋をつとめたという。入母屋造の民家であるが、保存がよく当初の平面を示す板絵図があるなど、県下の民家を知る上に重要な遺例となっているとのことである。先生から方位と家の構造の解説を受ける。この家には今は誰も住んでおられない様子で、かつ民家であり、先生は今回の旅行の中で一番よく見ておられたのがこの「林家住宅」ではなかったのではと思える。

## 普門寺と茅葺屋根

落合インターから出て、車がすれ違いするのがやや難の山道をしばらく走る。いきなり大勢の人がい



「備中国分寺」の「客殿」

る『お祭り＝紅葉祭り』の場所に出る。祭りでは、出店でのご飯を楽しみ、農産物や加工品などの販売がされ、多くの人があふれている。普門寺は「笠場山」で弘法大師が修行を行った際、吉兆を示す光を見たことから修行の地であると悟り、建立されたのがこの寺なのだそうである。『花の山寺』と呼ばれていて、四季を通じて美しい花々を愉しむことができる場所といわれている。

我々は、普門寺の前の茶店で茅葺屋根の家がどこにあるのでしょうかと尋ねる。すると、この山道があがったところでしょうかとの説明を受け、上がってみると、時代劇に出てくる茶店風のお蕎麦屋「花見庵」があり、その蕎麦屋さんが茅葺なのだ。山の上に立つとそこからは、一面に紅葉したカエデ（モミジ）を見ることができる。せっかくだから、ここでお昼ごはんにしようということで、順番待ちのカードをもらい昼食にした。その蕎麦にはいろいろな具が入っているけんちん汁風で、ものすごくうま、最後の一滴まで汁を飲んでしまった。

## 吉備路風土記の丘と茅葺

「吉備路風土記の丘」は、県が指定し、「県立自然公園吉備路風土記の丘」となっている。備中国分寺は、聖武天皇（741年）の勅願によって建てられた官寺である。なだらかな松林を背景にした田園風景の中に、ずっと立っている五重の塔が有名あり、吉備路のシンボルとなっている。

車を国分寺の駐車場に止め、白壁に沿ってしばらく歩いて国分寺の表門に出る。表門にはボランティアガイドの女性がいて、茅葺屋根のことを尋ねる。「国分寺客殿」「旧山手村役場」「松井家住宅」および「茶屋」の場所を確かめる。山門を入ると、正面に茅葺の客殿が見える。先ほどのガイドの方に我々4人の写真を撮ってほしいと頼む。ガイドの方は、五重の塔の前で写真を撮った方がよいと勧める。我々はそれに従い五重の塔の前で撮り、やはり茅葺の前でということなのでそこでの撮影もお願いした。



国分寺から「こうもり塚古墳」の方へ行き、県立吉備路郷土館の敷地内の、旧山手村役場と旧松井家の民家を尋ねる。いずれも江戸時代末期に立てられたもので、茅葺屋根が郷愁をさそう。旧山手村役場は、明治35年から昭和43年まで使用されていたと記されていた。



「旧山手村役場」

## 旧足守藩侍屋敷と近水園・吟風閣

足守と芦森、なじみを感じる。

木下家の初代足守藩主は木下家定<sup>いせさだ</sup>で、家定の妹の「ねね」が木下藤吉郎に嫁いでいる。家定は、関が



「旧足守藩武家屋敷」

原の合戦には参加しないで、北政所を守護した。そして、家定は、合戦前は姫路2万五千石の城主であったが、合戦後に石高は同じで備中足守藩主に所領替えになっている。

茅葺屋根の旧足守藩侍屋敷は、家老さんの家だったとのこと。それほど大きくはないが、殿様が来られると「一の間」にお通しするようである。私は、足守藩のご家老さんはこうした家に住んでいたのかと感心しながら見て回る。

家老屋敷を出て、通りかかった女性に「近水園<sup>きんすいえん</sup>」とはどう行くのでしょうかと尋ねたところ、そちらの方だという。そして、「きんすいえん」ではなく、「おみずえん」と読むのだといわれた。失礼かもしれないが女性から「おみず」と読むのですと聞いたときには変におかしかった。

しかし、足守川の右岸にあるのでおみずえんと称したとのこと。そして、この足守川というのは、備中高松城水攻めの川である。足守駅と備中高松駅とはJR西日本吉備線で隣の駅である。本能寺の変後、秀吉の中国大返しが高松城からであり、その水攻めはこの足守川の氾濫を用いたものである。

吟風閣は近水園の中に位置している。これは6代藩主が1708年、幕府の命によって京都御所の普請を担当した際に、その残材にて建てられたと言われている。足守藩は小藩ながらなかなかのものであると思いつつ近水園を後にした。

岡山の茅葺屋根の家の探索8か所を日暮れまでに回り、岡山駅に先生を無事お送りした。そして、来年の春には高野山近辺を訪ねることを予定している。



「近水園（おみずえん）・吟風閣」